

佐伯城跡測量調査報告書  
佐伯市内遺跡試掘確認調査報告書

2014

大分県  
佐伯市教育委員会





佐伯城跡全景 南西から豊後水道を望む





佐伯城跡と佐伯城下町 東から



佐伯城跡測量調査報告書  
佐伯市内遺跡試掘確認調査報告書

2014

大分県  
佐伯市教育委員会





## 序 文

本書は、平成21年度から25年度にかけて国庫補助を受け、佐伯城跡の石垣や曲輪などの遺構測量調査、ならびに佐伯市内で行われた試掘・確認調査の結果をまとめたものです。

佐伯城は、慶長11年に毛利高政によって城山山頂に築かれた近世城郭です。城跡には石垣の他にも雄池・雌池と呼ばれる水の手曲輪などが現在でも良好に残されています。また様々な動植物が生きる豊かな自然林でもあり、佐伯市の文化財の象徴として、また佐伯市民の憩いの場として愛されてきました。しかし築城から約400年が経過し、石垣の保存や城跡を含めた城山の活用など、解決すべき課題が浮かび上がっています。

今回の佐伯城の調査は、解決に向けた第一歩として、基礎資料となる正確な測量図を作成することを目指したものです。本報告書が、佐伯城の適切な管理や、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成26年3月31日

佐伯市教育委員会  
教育長 分 藤 高 嗣



# 例 言

- ・本書は、平成21年度から平成25年度まで国庫補助金及び大分県文化財補助金を受けて実施した、佐伯城跡及び佐伯市内遺跡の調査報告書である。
- ・調査及びに報告書作成は佐伯市教育委員会文化振興課・社会教育課が主体となって実施した。
- ・本報告書の執筆にあたり、第1章第4節を五十川慎也が、それ以外を福田が担当した。
- ・佐伯城跡の遺構実測は、平成21年度から平成23年度は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、平成24年度は株式会社大信技術開発に委託して実施した。
- ・空中写真は、撮影を九州航空株式会社に委託したほか、国土地理院が管理する米軍及び国土地理院撮影の空中写真画像データを購入した。
- ・本報告書で用いる方位は座標北、座標は世界測地系、標高は絶対高である。
- ・試掘・確認調査は福田・五十川が担当し、遺構実測・写真撮影も両名が行った。
- ・調査にかかる記録類や出土遺物は、佐伯市教育委員会が保管している。

# 目 次

## 佐伯城跡

第1章 はじめに	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過と概要	3
第3節 調査体制	4
第4節 地理的・歴史的環境	5
第5節 佐伯城の沿革	7
第2章 測量調査	8
第1節 測量の方法	8
第2節 参考資料	9
第3節 測量調査の成果	14
第3章 まとめ	25
写真図版	27

## 佐伯市内遺跡試掘・確認調査

第4章 佐伯市内の試掘・確認調査	37
第1節 平成21年度の調査	39
第2節 平成22年度の調査	42
第3節 平成23年度の調査	45
第4節 平成24年度の調査	46
第5節 平成25年度の調査	48

## 挿図目次

### 佐伯城跡

第1図	佐伯城位置図 (S=1/150,000) .....	2
第2図	各年度測量範囲 (S=1/10,000) .....	3
第3図	周辺遺跡地図 (S=1/50,000) .....	6
第4図	佐伯城全体遺構測量図 (S=1/3,000) .....	15・16
第5図	佐伯城山頂遺構測量図 (S=1/1,500) .....	17・18
第6図	佐伯城西出丸遺構測量図 (S=1/600) .....	19
第7図	佐伯城二の丸遺構測量図 (S=1/600) .....	19
第8図	佐伯城本丸遺構測量図 (S=1/600) .....	21
第9図	佐伯城北出丸遺構測量図 (S=1/600) .....	21
第10図	佐伯城水の手遺構測量図 (S=1/100) .....	23
第11図	佐伯城三の丸遺構測量図 (S=1/500) .....	23

### 佐伯市内遺跡試掘・確認調査

第12図	試掘・確認調査遺跡位置図 .....	38
第13図	調査地点位置図 (S=1/50,000) .....	39
第14図	周辺地形図 (S=1/10,000) .....	39
第15図	調査地点位置図 (S=1/50,000) .....	40
第16図	トレンチ配置図 (S=1/1,500) .....	40
第17図	調査地点位置図 (S=1/25,000) .....	41
第18図	トレンチ配置図 (S=1/1,500) .....	41
第19図	調査地点位置図 (S=1/25,000) .....	42
第20図	トレンチ配置図 (S=1/3,000) .....	42
第21図	調査地点位置図 (S=1/25,000) .....	43
第22図	トレンチ配置図 (S=1/1,500) .....	43
第23図	調査地点位置図 (S=1/25,000) .....	44
第24図	トレンチ配置図 (S=1/3,000) .....	44
第25図	調査地点位置図 (S=1/25,000) .....	45
第26図	トレンチ配置図 (S=1/5,000) .....	45
第27図	調査地点位置図 (S=1/25,000) .....	46
第28図	周辺地形図 (S=1/1,500) .....	46
第29図	調査地点位置図 (S=1/25,000) .....	47
第30図	台場周辺実測図 (S=1/300) .....	47
第31図	調査地点位置図 (S=1/25,000) .....	48
第32図	トレンチ配置図 (S=1/2,500) .....	48

## 資料目次

資料1	宝永六年「豊後国佐伯城破損絵図」 .....	9
資料2	元文三年「御城並御城下絵図」 .....	10
資料3	延享二年「豊後国佐伯城破損之覚」 .....	11
資料4	「明治四年頃佐伯藩時代屋敷図」 .....	12
資料5	「高慶公御手日記写（佐伯）」(温故知新録) .....	24
資料6	「諸旧記」（温故知新録） .....	24

# 写真図版目次

## 佐伯城跡

写真1	1947年佐伯城跡周辺空中写真（米軍撮影） 1948年佐伯城跡周辺空中写真（米軍撮影）	28
写真2	1965年佐伯城跡周辺空中写真（国土地理院撮影） 2008年佐伯城跡周辺空中写真（国土地理院撮影）	29
写真3	佐伯城跡遠景 三の丸櫓門 積雪の三の丸櫓門 三の丸石垣全景 三の丸石垣北端	30
写真4	西出丸全景 西出丸虎口 西出丸二重櫓跡 西出丸建物基礎 西出丸石垣上の石列 西出丸高射砲跡 西出丸南端の犬走り 西出丸西の犬走り	31
写真5	二の丸全景 二の丸渡櫓跡 二の丸平櫓跡 二の丸建物基礎 二の丸石垣上の石列 二の丸西の犬走り 本丸外曲輪と本丸虎口 本丸虎口	32
写真6	二の丸虎口と廊下橋跡 廊下橋跡 本丸 本丸石垣 天守台跡 本丸櫓跡 本丸外曲輪二重櫓跡 本丸外曲輪虎口	33
写真7	本丸石垣 本丸外曲輪北の犬走り 本丸外曲輪北の食い違い虎口 北出丸虎口 北出丸平櫓跡 北出丸二重櫓跡 北出丸西の犬走り	34
写真8	雄池全景 雄池石組護岸と階段 雌池全景 雌池石組護岸と階段 西出丸下段の捨曲輪 西出丸西斜面の溝	35
写真9	北出丸下段の捨曲輪 北東尾根上の捨曲輪 本丸下段の捨曲輪 捨曲輪をつなぐ通路 登城の道の池跡 独歩碑の道に残る城道 三の丸庭園	36

## 佐伯市内遺跡試掘・確認調査

写真10	試掘調査状況	39
写真11	T 2土層 北から	40
写真12	T 1 遺構検出状況 南から	41
写真13	T 10遺構検出状況 西から	42
写真14	T 1 東端土層 北から	43
写真15	T 4 西壁土層 東から	44
写真16	T 2完掘状況 南から	45
写真17	竹中家屋敷跡階段検出状況 南東から	46
写真18	トレンチ土層 北から	47
写真19	T 2 遺構検出状況 南東から	48

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査にいたる経緯

佐伯城の所在する佐伯市は大分県の南端に位置し、東は豊後水道を望み、北は津久見市と臼杵市、西は豊後大野市、南は宮崎県延岡市と接している。平成17年に1市8町村が合併し、903.4平方キロメートルという九州最大の市域に約78,000人が住んでいる。

現在の佐伯市中心市街地は、市内を東流する一級河川番匠川の河口付近である。市街地化の基礎となったのは、慶長6年(1601)に入部した毛利高政による佐伯城と佐伯城下町の建設であり、近世以来の豊後南部地方における中核都市の一つである。現状での佐伯城の城郭建築物は三の丸櫓門を残すのみであるが、山頂の石垣は一部に近代の改修を加えたほかは概ね近世の形状を留めている。また佐伯城下町をもとに形成された市街地も、寺院の位置や地名、道筋など当時の様相を残すものが多い。

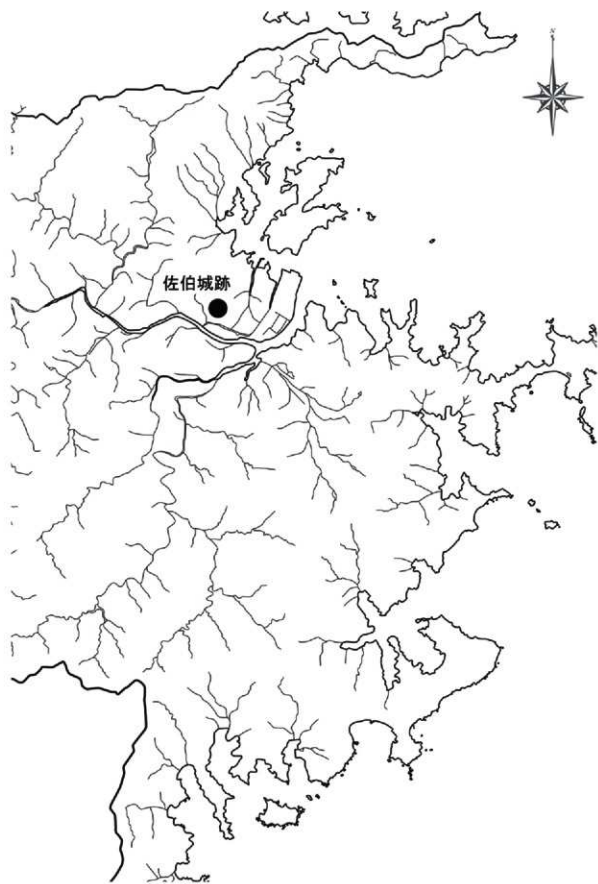
こうした歴史的背景と、中心市街地に隣接するという地理的条件によって、佐伯城は佐伯市を象徴する遺跡となっている。現在は公園として一般に開放されており、歴史に興味を持つ観光客のみならず、佐伯市民も散策や体力づくりのために日常的に登っている。郷土史研究の対象としても第一に挙げられる遺跡であり、現在残されている佐伯城の遺構のほか、佐伯藩政史料や温故知新録をはじめとした地域に残る古文書や絵図などを資料として、近代以降多くの郷土史家によって調査や研究が行われてきた。

ところが、佐伯城についてはこれまでに正確な遺構測量図が作られることはなかった。佐伯城に関する研究が藩祖毛利高政の事績の

解明を指向する傾向が強かったことや、小規模な城郭のため構造を理解しやすいこと、縄張りが詳細に描かれている絵図が残されていたことが背景にあったと思われる。また、一般の市民にとっても城跡を保存したいという意識が強く、調査を迫られるような大規模開発を免れてきた経緯もある。

今回の調査を実施する以前は、都市計画図や住宅地図などの地形図に、絵図等を参考にして、研究者や事業者が各々縄張図を作成していた。教育委員会でも、測量成果に基づく縄張図がないため、研究者や観光客への対応に苦慮していた。また、石垣の修復や保護、急傾斜地対策、治山対策など、公園管理や安全対策のための事業についても、詳細な記録が引き継がれているものは少ない。

近年全国的に小規模城郭が見直されるなか、佐伯城についても全国的な視点からその特徴が目立つつある。このように研究・活用のため、また維持管理のためにも、佐伯市が主体的・積極的に佐伯城の保存と活用を進めるための基礎情報となる、遺構測量図を作成することが課題となっていた。



第1図 佐伯城位置図 (S=1/150,000)

## 第2節 調査の経過と概要

### 《平成21年度》

国庫補助を受けて、佐伯城の測量図作成を開始。山頂石垣のうち二の丸と西出丸の平面測量を実施。当初の測量対象は山頂の石垣のみであり、平成22年度までの2か年での事業を想定していた。しかし現地での調査指導の結果、佐伯城の特徴を理解するためには石垣周辺に広がる曲輪と水の手を含めた山全体の測量が重要であると判断されたため、平成23年度・24年度も継続して測量を行うように計画を変更した。また、これらの測量図に記録すべき遺構の有無を確認するため、山腹の踏査を開始。西出丸西方の斜面に溝状遺構を確認。

### 《平成22年度》

本丸・北出丸の平面測量を実施した。山腹の踏査を継続し、北の丸西方に浅い溝状の窪みがあることを確認した。

### 《平成23年度》

水の手（雄池・雌池）の平面測量を実施。北出丸から水の手へ続く道も対象とした。また、特に池の周囲は重要遺構であるため、縮尺1/50での実測図作成も行った。山腹の踏査により、城道の残存状況を確認。

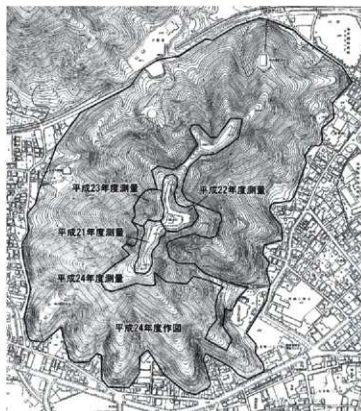
### 《平成24年度》

三の丸及び山頂尾根に伸びる捨曲輪と部元から続く城道のうち、近世の城郭遺構と認められる範囲の測量を実施。さらに全山を対象にした都市計画図をト

レースし、前年度までの測量図と合成した。また、佐伯城及び佐伯城下町と周辺地形の理解のため、空中写真撮影を行った。

### 《平成25年度》

平成21年度から平成24年度までの調査成果を整理し、報告書作成作業を行った。



第2図 各年度測量範囲 (S=1/10,000)

### 第3節 調査体制

調査は以下の体制で実施した。

#### 【調査主体】

佐伯市教育委員会

#### 【調査指導】

豊田 寛三（大分大学教育福祉科学部教授）（平成21年度）

（別府大学学長）（平成22～25年度）

後藤 宗俊（別府大学名誉教授）（平成21～25年度）

宮武 正登（佐賀県教育庁社会教育・文化財課）（平成21～25年度）

田中 祐介（大分県教育庁文化課）（平成21年度）

後藤 晃一（大分県教育庁文化課）（平成22～23年度）

横澤 慈（大分県教育庁文化課）（平成24～25年度）

#### 【調査事務】

佐伯市教育委員会文化振興課（平成21～23年度）

竹中 伸吾（文化振興課長）（平成21年度）

河野 宜弘（文化振興課長）（平成22～23年度）

大石 定廣（文化振興課参事）（平成21年度）

今山 勝博（文化振興課課長補佐）（平成23年度）

（文化振興課係長）（平成21～22年度）

吉武 牧子（文化振興課係長）（平成23年度）

（文化振興課主査）（平成21～22年度）

福田 聡（文化振興課主任）（平成23年度）

（文化振興課事務員）（平成21年度～22年度）

五十川慎也（文化振興課嘱託職員）（平成21年度～23年度）

佐伯市教育委員会社会教育課（平成24～25年度）

福岡 裕子（社会教育課長）（平成24年度）

清家 隆仁（社会教育課長）（平成25年度）

今山 勝博（社会教育課課長補佐）（平成24年度）

淡居 宗則（社会教育係長）（平成25年度）

吉武 牧子（社会教育係長）（平成24～25年度）

福田 聡（社会教育課主任）（平成24～25年度）

五十川慎也（社会教育課嘱託職員）（平成24～25年度）



#### 第4節 地理的・歴史的環境

【地理的環境】九州一の広大な市域を有する佐伯市には、番匠川下流に発展した市街地、西部・南部の山間部、東部の海岸部と、多様な自然環境に恵まれている。佐伯城は、番匠川左岸、佐伯市街地に隣接する城山の山頂にある。城山の北は狭い谷を隔てて白坪の山と対峙し、東・西・南の三面は山裾を平野に伸ばしている。山頂付近は比較的緩やかな地形だが、山腹は急な斜面となり、自然林が広がる。340種類の植物と、湿地にはオオイタサシショウウオなどもおり、多種多様な動植物が生息する貴重な場所ともなっている。

【歴史的環境】佐伯の歴史を遡ると、旧石器時代に関しては遺物が僅かに散見されるものの生活を伴う遺跡は発見されていない。縄文時代になると、遺跡の多くが山間部の台地や段丘上にみられる。佐伯門前遺跡や森の木遺跡では早期の土器と共に集石遺構が確認された。その他、下城遺跡や長良貝塚でも遺物が発見されている。弥生時代になると、堅田川流域にある下城遺跡や長良貝塚、そして城西麓の白濁遺跡で調査が行われ、住居跡や土器と共に貝塚も確認された。下城遺跡で発見された甕や壺は、豊後地域の弥生時代前期・中期を代表する「下城式土器」と命名され、土器形式名として名を残すこととなった。古墳時代になると、大型の古墳はないが大入島や番匠川・堅田川河口周辺の丘陵上や島嶼部に古墳が存在するようになる。萩山古墳は前期末～中期、室剣山古墳と樫野古墳は中期後半頃の築造と考えられる。樫野古墳から出

土した土師器は宮崎平野を中心とした地域に分布する土器に系譜を求められ、両地域の交流を考える上で重要な資料である。また、後期のものとしては雨龍山と呼ばれる独立状の小丘陵に営まれた上小倉横穴墓群がある。その他、下久部岡ノ谷から舟形石棺が出土したといわれているが詳細は不明である。集落遺跡としては汐月遺跡で住居址が確認されている。奈良・平安時代になると佐伯地域は律令制下における海部郡の穂門（ほと）郷に属していたと考えられるが、奈良時代以前の史料や文献には「佐伯」の地名はどこにも見られない。この地域に「佐伯」の地名を確認できるのは平安時代にはいつからである。平安時代後期の『本朝世紀』に「賊徒、今月（九月）六日に当国豊後海部郡佐伯院に襲いきたり」とあるのがそれである。この院の推定地には、汐月遺跡や上の台遺跡が有力視されている。他に、白濁遺跡からは奈良時代末～平安時代中期の蔵骨器4点が発見されている。中世になると佐伯地域は佐伯荘と呼ばれるようになり、そこを支配したのは佐伯氏であった。佐伯地方で独自の勢力を保ち、その統治は豊臣政権の時代まで続いた。その中心地の一つに梅牟礼城と、その東山麓の古市遺跡周辺がある。梅牟礼城は戦国期の佐伯氏の拠点となった大規模な山城であり、佐伯惟治によって築かれたと言われている。周辺には鎌倉時代の造立とされる十三重塔をはじめ、佐伯氏にまつわる遺跡や伝承が多く残っている。その後、文禄2年（1593）に大友氏が改易されると、佐伯氏の支配も終焉を迎える。佐伯氏が去ったのち、慶長6年に毛利高政が入部して、ここに佐伯藩としての歴史が始まる。

#### 【参考文献】

- 佐伯市史編さん委員会 1974『佐伯市史』
- 佐伯市 2013『佐伯市環境基本計画【改定】』
- 番匠川流域ネットワーク 2007『豊かな佐伯城山の自然』
- 佐伯市教育委員会 2003『佐伯城下町遺跡 山中家屋敷跡・竹中家屋敷跡』



1. 佐伯城跡	2. 佐伯城下町	3. 白濁遺跡	4. 萩山遺跡群
5. 宝剣山古墳	6. 大友山砦跡	7. 瀬戸遺跡	8. 岡ノ谷古墳
9. 中山砦跡	10. 下城遺跡	11. 八幡山城跡	12. 長良貝塚
13. 上ノ台館跡	14. 上の台遺跡	15. 沙月遺跡	16. 宇山城跡
17. 元越遺跡	18. 長谷山際遺跡	19. 高城跡	20. 樗野古墳
21. 三上寺跡	22. 二上寺跡	23. 佐伯門前遺跡	24. 古市遺跡
25. 十三重塔	26. 木戸城跡	27. 曳地館跡	28. 榎牟礼遺跡
29. 榎牟礼城跡	30. 小田山城跡	31. 小田山館跡	32. 上小倉横穴群
33. 平城跡			

第3図 周辺遺跡地図 (S=1/50,000)

## 第5節 佐伯城の沿革

佐伯城は慶長六（1601）年に佐伯に入部した毛利高政によって築かれた近世城郭で、標高146mの城山山頂に築かれた山城である。慶長七（1602）年に築城が開始され、完成は慶長九（1604）年と十一（1606）年の2説有り、それぞれ普請、作事の終了年と解されている。高政は築城に際して、織田家遺臣で安土城の築城にも関わった市田祐定を招いて、縄張りや築城作業を任せている。石垣作事は播州の羽山勘右衛門を起用したが、勘右衛門は期間中に高政の勘気を被ったために殺されたと言われる。なお、高政が八幡山（現城山）を築城地に選んだとき、山頂には緒方惟栄を祀った八幡社があった。高政はこれを西山裾の白濁地区に移築して白濁八幡宮と号し、城の鎮守とした。こうして完成した佐伯城であるが、早くも元和三（1617）年には雷火によって二の丸を焼失し、藩政初期の諸記録類も失ってしまった。また天守閣もこれと同時に、近い時期に失っており、築城当初の姿を知ることはできない。わずかな手がかりとして、後世に編纂された『温故知新録』や『佐伯茶飲話』などに伝えられる記録や伝承によって、南向きの三重天守であったと考えられるのみである。

築城からしばらくは山頂で藩政を行っていたが、寛永十四（1637）年三代藩主高尙のときに藩政の不便と藩主の幼年のため、麓の三の丸に御殿を増築し、藩庁機能を移転した。

その結果、利用されないまま荒廃が進んだ山頂の城郭を問題視した六代藩主高慶が、宝永六（1709）年から享保十三（1728）年までかけて大修築を行った。このとき、高慶は高

政築城時の形状に復元することを基本として普請を命じている。当初の形状を留める箇所を文書に書き出して調査確認し、旧状の分からない箇所は身分不問で議論のうえ、方針を決定するという念の入れようである。ただし天守閣は復元されることはなく、これ以降も石垣や塀の修理は逐次行われるが、天守閣が復元されることはなかった。

近世を通じて佐伯藩毛利家の居城であったが、明治四（1871）年には廃城となり、三の丸の御殿と櫓門を残して建造物は全て撤去され、城山も国有地となる。明治34年には当時の毛利家当主毛利高範が国に働きかけ、城山の土地の払い下げを受けることに成功する。佐伯にとってのシンボルであったことは変わらず、昭和3年には佐伯町民の寄付によって、城山山頂の旧天守曲輪に佐伯藩八代藩主毛利高標を祭神とした毛利神社が創建された。昭和57年には土地の大半が佐伯市に寄贈され、現在は山頂の神社地と麓の一部に寺地、私有地があるほかは、市有地となっている。麓の三の丸にあった御殿は明治期に校舎として転用され、昭和45年まで残っていたが、同地に文化会館を建設するため解体された。現在は御殿の一部が船頭町に移築され、集会所になっている。現在は、三の丸櫓門が唯一の城郭建築である。創築は寛永十四（1637）年にさかのぼり、大分県指定有形文化財に指定されている。

こうした経緯もあって、城山は大規模な開発を免れてきた。都市公園となった城山は一般に開放されている。観光客だけでなく体力づくりや散策を目的とした市民も頻繁に登り、市民生活にとけ込んだ城郭である。

### 【参考文献】

佐伯市史編さん委員会 1974 『佐伯市史』  
佐伯市教育委員会 1995～2013 『佐伯藩史料 温故知新録』一一十

## 第2章 測量調査

### 第1節 測量の方法

今回の測量調査は佐伯城にとって初めてのことであり、今後の調査や維持管理のための基礎資料となるものである。したがって、現在把握している情報を過不足無く表現すると同時に、後の加除修正や活用を行いやすいことも求められた。そのため、以下の仕様によって委託業務を発注し、測量図化を行った。

#### 1 測量図化の対象

測量対象は佐伯城の城郭遺構であり、事業開始当初は山頂の石垣部分のみを図化対象としていた。しかし、事業の進行に伴う調査や指導の結果、石垣以外にも佐伯城を特徴付ける城郭遺構が点在し、山全体で城郭としての機能を発揮することが分かってきた。今回の調査を機に、これら石垣以外の城郭遺構も図化して保護対象とし、山全体の地形図に遺構実測図を合成したものを作成することを目標とした。

#### 2 測量の縮尺

測量の縮尺は1/500を基本とした。これは、石垣や地形の変化を表現するのに十分であり、かつ山腹に残る道の幅を正確に表現することも可能だったからである。水の手周辺は重要遺構であるものの崩壊が進行しつつあり、石組平面図も含めたより詳細な記録を作成するために縮尺1/50でも作図している。また、山全体を対象とした測量にあっても、道の幅を表現しうる1/1,000での作図とした。

#### 3 測量の方法

測量は公共座標第Ⅱ系を用い、空中写真撮影にはよらないこととした。等高線は50cm間隔を基本として、縮尺1/50の測量図では20cm間隔である。

石垣や石組の測量では、天端と下端の変化点を計測し、隅角部の位置や形状を明示した。石垣の表記については、近世城郭遺構としての石垣、近代以降の石垣、コンクリートなどによる護岸・治山、を識別し、表記方法を変えて差を明示することとした。石組や石列、石敷については、面をそろえているラインを計測した。この他の遺構等の位置及び上端・下端の位置と表記は作業前に教育委員会が指示し、作業中も適宜協議を行いながら決定した。なお、佐伯城全体は都市公園に指定されているため、原則的に草木の伐採や枝打ちはできない点に十分な注意を払った。また、縮尺1/1,000で全山を対象にした測量図作成にあたっては、遺構の周辺のみを実測し、遺構の存在しない範囲は縮尺1/2,500都市計画図をトレース・修正し、実測図面と合成した。

#### 4 成果品

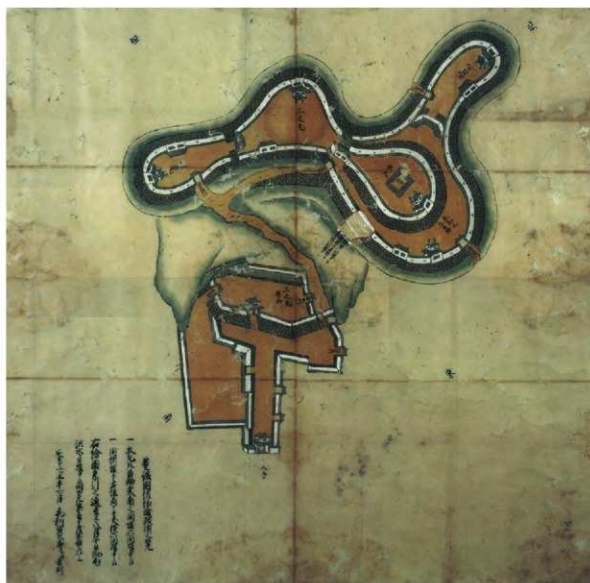
成果品は、紙出力した測量図と測量成果簿とした。ただし、平成24年度に全ての測量成果を統合して作成した全山の測量図は、後の活用のための加除修正を行う際の原因となるものである。そのため、山全体を対象とした測量図についてはソフトウェアを使用した編集を想定して、紙出力に加えてDXF形式での納品とした。



資料 1 宝永六年「豊後国佐伯城破損絵図」



資料2 元文三年「御城並御城下絵図」



資料3 延享二年「豊後国佐伯城破損之覚」







## 第2節 参考資料

佐伯城の遺構について述べる前に、調査の参考とした以下の絵図資料について紹介しておきたい。

資料1 宝永六年「豊後国佐伯城破損絵図」

資料2 元文三年「御城並御城下絵図」

資料3 延享二年「豊後国佐伯城破損之覚」

資料4 「明治四年頃佐伯藩時代屋敷図」

個人所蔵の資料1を除き、他は佐伯市教育委員会の所蔵資料である。

資料1は、宝永六（1709）年に作成されたもので、宝永四（1707）年に発生した大地震によって崩落した石垣等の修理を幕府に願出たものである。石垣の形状はかなり簡略化して描かれているが、門の種類や塀の長さなどが記載されている。既に天守はなく、天守台の記載があるのみである。また三の丸には「唯今之居所」と記載され、すでに藩主の住宅等が三の丸に移っていたことが分かる。

資料2は元文三（1738）年に描かれた佐伯城と佐伯城下町の絵図である。六代藩主高慶による大修築が完了して10年後のものであり、建物や塀なども大修築によって復元されたものと考えられる。城下町の様子も地割に至るまで細かく描かれ、上級の家臣の屋敷地には名前も記入されている。道にはそれぞれの名称とともに幅と長さが記録されている。特に捨曲輪と水の手、山際通りからの城道について描いてある唯一の資料である。宝永六年と延享二年のような幕府へ提出する絵図とは全く違った構図であり、大修築や城下の再編の完了に際して、現状記録のために描かれた絵図ではないかと考えられる。

資料3は延享二（1745）年、前年の大風雨

洪水によって破損した塀と石垣の修復を幕府に願出たものである。同じく修復を願出た宝永六年の絵図に構図や曲輪の簡略化がよく似ている。幕府への提出用絵図には同じ雛形を用いたのではないかとと思われる。

資料4は大正四年に、製作されたものである。当時の佐伯町の地図を元に、明治四年頃、未だ藩政時代の様子が残る佐伯城下町を、記憶を頼りに再現している。特に城下町は非常に詳しく、各戸の居住者名が細かく記入されている。山頂の城跡については、明治初期に建築物が解体されていたこともあり、石垣の外形と御天守と記されるのみである。三の丸周辺は詳しく描かれ、各役所や倉庫などの位置がよく分かる。三の丸の御殿裏には池と稲荷神社が描かれている。

これらの資料のうち、佐伯城の全容と建築物が最も詳細に描かれているものは元文三年絵図である。本報告書では、基本的に曲輪等の名称はこの元文三年絵図の名称にもとづいて報告する。

### 第3節 測量調査の成果

#### ・城道（第4図ア～エ）

麓から山頂の城郭までの登山道は、現在は4本が整備されており、それぞれ登城の道、独歩碑の道、翠明の道、若宮の道と通称されている。このうち、近世の絵図に描かれているものは、南東側の谷筋を登る登城の道と、東側の斜面を登る独歩碑の道の一部である。

登城の道（ア）は現在の道がほぼそのまま絵図の城山道に一致する。岩盤や礫が剥き出しの部分が多く、傾斜も急であるが、全ての絵図に描かれており、最も正式な登城道であると考えられる。また、途中には斜面をえぐるように掘削して造られた池の跡が確認できる（イ）。元文三年絵図にみられる池と一致するもので、道のすぐ近くを流れる雨水の調整用池であると考えられる。

独歩碑の道（ウ）は大正期に開削された登山道が元になり、麓の三の丸から大きく北に曲がり、比較的緩やかな傾斜で山頂の本丸外曲輪につながる道である。道幅が広く、手すりや舗装などによる整備がなされている。近世の絵図では、元文三年絵図には本丸と麓の屋敷地を結ぶ城道が描かれており、この道の上部と独歩碑の道の上部が重複する。現地の踏査によって、独歩碑の道の一部に旧道と見られる細い城道を発見した（エ）。登城の道と同様に岩盤を削っただけの道であり、近世の道の一部の可能性が。図化した位置から麓までの斜面には、道の痕跡は確認できなかった。なお、通称の由来は明治期に佐伯で教師をしていた国本田独歩が、城山登山を好んだことによるものである。

#### ・捨曲輪（第4図オ～ケ）

これらの道を上ると山頂の曲輪に到達するが、その少し手前で分岐し、各曲輪の下の段

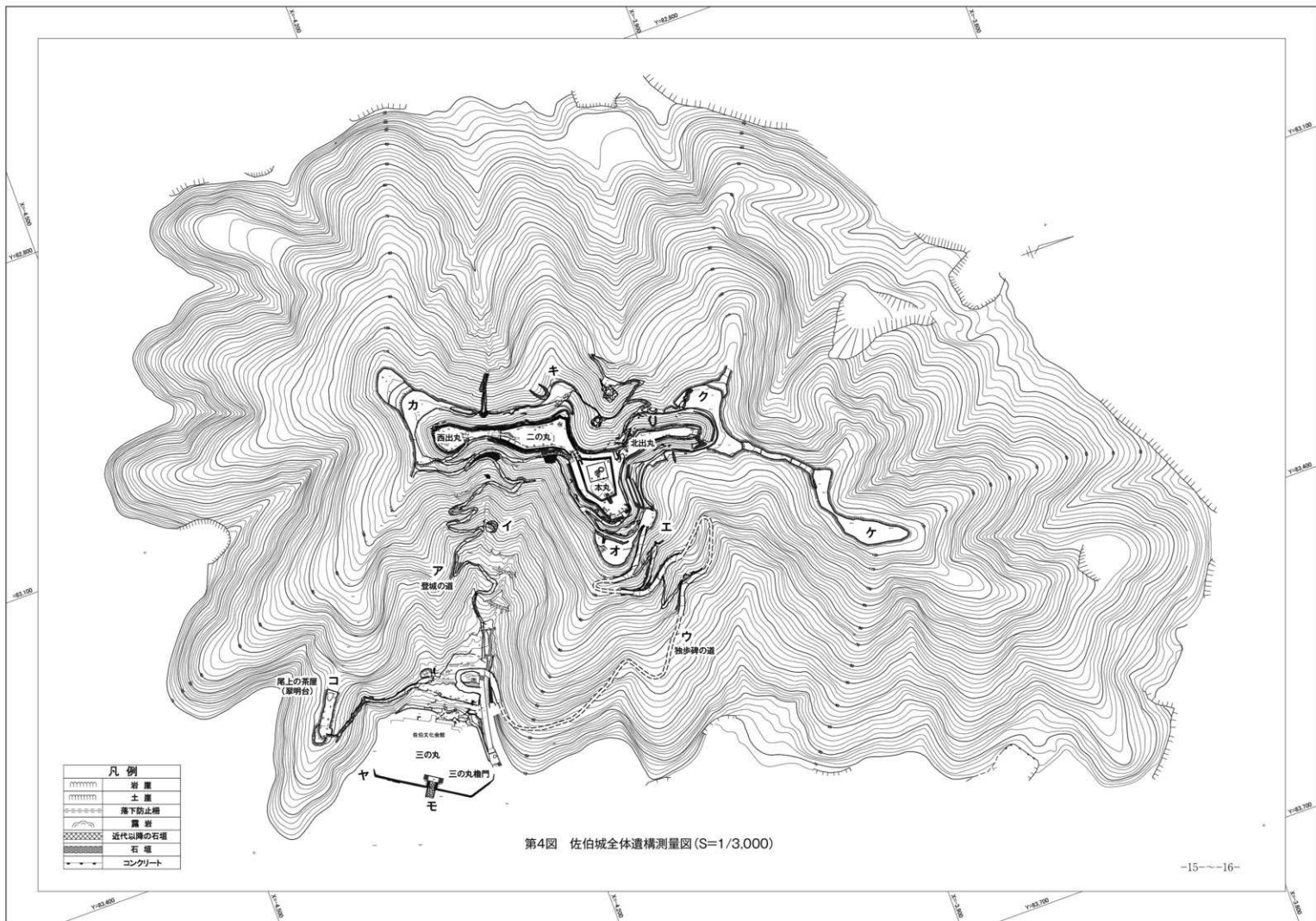
に広がるテラス状の平坦面に通じる。いずれも元文三年絵図において捨曲輪（オ～ケ）と表記され、それぞれの長さや幅が明記されている。城下の道も同様に幅と長さが記録されていることから、自然地形ではなく施設の一部と認識されていたとわかる。また、『温故知新録』には宝永六年にはじまる大修築に際して、作業に当たる人夫の小屋を石垣下に建てたとする記述がある（資料5）。このことから、大修築以前から捨曲輪があったと推測できる。

オは本丸の下に位置し、半円形を呈する。後世に若干の整備がなされたようで、現状はかなり水平に整えられており、物置小屋が建てられている。カは西出丸の下の段に位置する捨曲輪である。登城の道から西出丸への途上で分岐して接続し、西出丸を巡っている。南西方向には二段の造作が認められる。キは二の丸の西側下の段に位置する小規模な捨曲輪である。クは北出丸下段の捨曲輪で、西出丸下段の捨曲輪と並んで面積が広い。クから北東方向に伸びる尾根上にケの捨曲輪が広がる。逆くの字型に曲がる尾根の頂部を平坦に削っている。周囲はかなりの急斜面である。これらの捨曲輪は犬走り状の通路で連結され、石垣の下を一周している。

カとキをつなぐ通路の中間に、溝状の遺構がある。谷筋にそって掘られており、中腹で自然流路に合流する。カの南にも地形上の窪みが見られるが、こちらはやや不明瞭である。周囲に同様の溝は見られず、それぞれ単独の遺構と考えられる。山城における堅壁というよりは、排水溝として掘削されたと考えられる。

#### ・尾上の茶屋（第4図コ）

元文三年絵図では、三の丸から西の尾根上に尾上の茶屋と書かれた曲輪がある。面積は



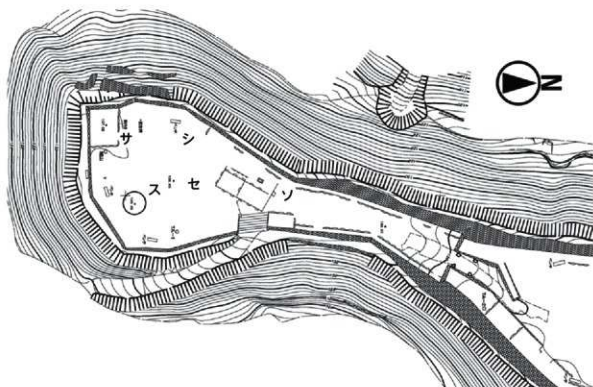
第4図 佐伯城全体遺構測量図 (S=1/3,000)



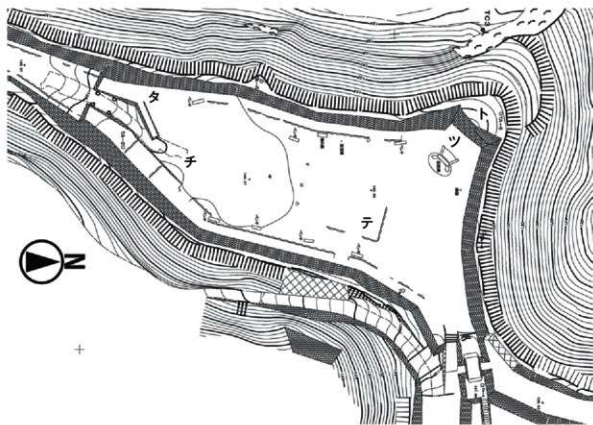
凡例	
	岩
	土
	落下防止線
	露岩
	近代以降の石垣
	石垣
	コンクリート

第5図 佐伯城山頂遺構測量図(S=1,000)





第6図 佐伯城西出丸遺構測量図 (S=1/600)



第7図 佐伯城二の丸遺構測量図 (S=1/600)

狭く、柵で囲まれた中に板葺きと見られる小屋が描かれている。現況でこの尾上の茶屋に相当する場所は、翠明台と名付けられて公園化されている(コ)。造成によって平坦面が広げられたようである。三の丸からの道も整備されているが、これは絵図に描かれた道を踏襲したと思われる。なお、4本の登山道のうち翠明の道と呼ばれる1本が、翠明台から尾根伝いに山頂へ登るものである。しかしどの絵図にも描かれていないことから、遺構として測量はしていない。

#### ・西出丸(第6図サ～ソ)

山頂の曲輪のなかで最も南西に位置し、登城の道をまっすぐ登り切ると、西出丸に入る。曲輪の南西隅には二重櫓が築かれ、その基礎となる石敷き(サ)を確認できる。西の石垣上には平櫓があり、基礎の一部が残る(シ)ほか、石垣上端から約60cm幅で平行に走る石列がある。塙の基礎であろうか。

曲輪の中には大戦中の高射砲跡(ス)があり、中央にある建物基礎(セ)もコンクリートが付着することから太平洋戦争時の遺構であろう。虎口の門は、宝永六年絵図と延享二年絵図では冠木門と記載されるが屋根が載る。現在の分類では薬医門または棟門と思われる、平櫓が隣接する(ソ)。出入り口の階段は他の曲輪の入口に比べて広く、他では使われない凝灰岩があることから、ここも太平洋戦争中に改変されている可能性が高い。

曲輪石垣の裾には幅50cmから1mほどの大走りがある。これは以降の各曲輪でも同様である。

#### ・二の丸(第7図タ～ト)

本丸と西出丸の間に位置し、山頂の曲輪の中ではフラットな面積が最も広い。西出丸との境ほどの絵図でも渡櫓が描かれている。門

の位置には4基の礎石が残され、石敷きとなっている。また一直線に出入ることはできず、くの字型に曲がらなくてはならない(タ)。門の北側には平櫓がある(チ)。他の曲輪の平櫓に比べて大型のものである。北西の隅には二重櫓が描かれるが、現在は基礎を確認することができない(ツ)。元文三年絵図には曲輪内に大小の建物が描かれており、最も大きい平屋建物の基礎と見られる石列と礎石が残されている(テ)。曲輪石垣の裾には大走りがあり、二重櫓の下では幅が広がっている(ト)。

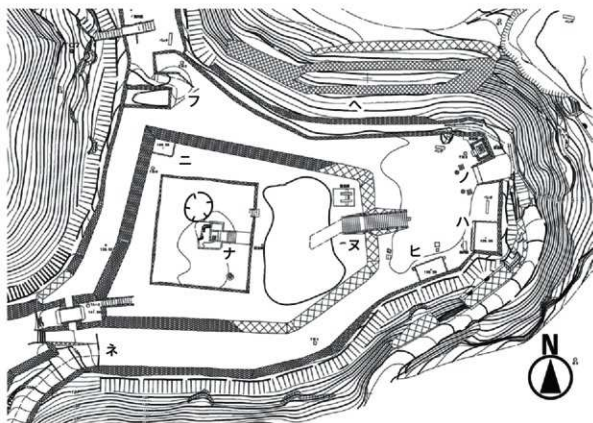
北は本丸外曲輪、本丸曲輪へと続くが、これは二の丸への出入り口として理解するよりも、登城の道から本丸へ至る行程を複雑にし、複数の曲輪を経由させることで本丸の防衛を図る構造であると考えべきである。

#### ・本丸(第8図ナ～ネ)

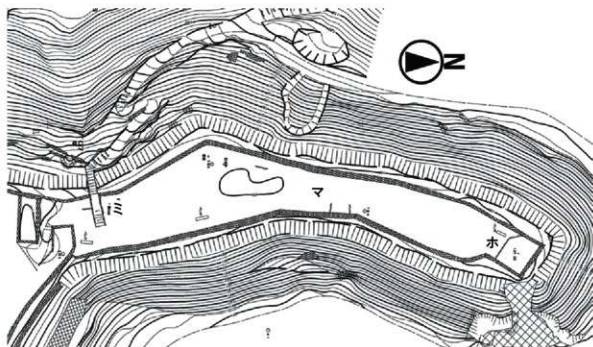
佐伯城の最高所であり、中央に天守台石垣がある(ナ)。東西17m南北15mを測る。「温故知新録」には七間半×八間半と記載がある(資料6)。高さは80cm程度と低い。天守台の中央には昭和3年に創建された毛利神社の社があり、その北東にはえぐれたような窪みがある。太平洋戦争時の爆弾炸裂痕ではないかと思われる。

本丸曲輪の北東隅には小規模な櫓跡が確認できる(ニ)が、絵図には描かれていない。東には本丸外曲輪と直接つながる階段がある(ヌ)が、コンクリート製であり、近代のものである。本丸曲輪の東半は隅角が丸く築かれており、近代以降に積み直していると考えられる。ただし、絵図と比較する限り、位置は変更されていないようである。絵図ではいずれも石垣上に二重櫓が描かれている。

天守への進入は、本来は堀切状の石垣によって分断された二の丸方向からのみである



第8図 佐伯城本丸遺構測量図 (S=1/600)



第9図 佐伯城北出丸遺構測量図 (S=1/600)

(ネ)。二の丸との間は、現状は橋がかかっているが、当時は廊下橋であった。登城の道から本丸外曲輪に入り、二の丸を経由して廊下橋を渡って本丸曲輪へと入る。各曲輪には門が設けられ、本丸曲輪への入り口は幅約80mと非常に狭く造られており、防御性の高さが窺える。

・本丸外曲輪（第8図ノ～ヘ）

本丸曲輪の周囲を巡る曲輪である。先述のように、現在はコンクリート製の階段で直結するが、本来は直接本丸には入れない構造であった。

二の丸・登城の道に加え、独歩碑の道が本丸を正面に見る位置につながる（ノ）。石敷きの斜面となり、絵図資料から門が備えられていたことが分かる。門の南には二重櫓があり、石敷きの基礎が残っている（ハ）。ヒは元文三年以降の絵図で平櫓として描かれたものと考えられるが、宝永六年絵図では鐘撞堂の位置にあたる。

北は北出丸へと続く食違い虎口である（フ）。元文三年絵図・延享二年絵図では渡櫓と思われる描かれ方で、宝永六年絵図では石垣のみが描かれる。

曲輪の北斜面には近代の土留めと思われる石垣（ヘ）があり、他の曲輪に比して明瞭ではないが、石垣下位の犬走りも周囲に確認できる。

・北出丸（第9図ホ～ミ）

山頂の曲輪の北端に位置する、細長く伸びた形状の曲輪である。曲輪の北端に二重櫓の基礎を確認できる（ホ）ほか、一部に平櫓とみられる石列が残っている（マ）。

西側には水の手へと降りる虎口がある（ミ）。北出丸には城下町から上がる道はなく、水の確保を含めて、搦手の防衛上の機能

を与えられたと思われる。

・水の手（第10図ム～メ）

北出丸から城山北西斜面へと降りる道があり、水の手へと続いている。2段造られた池のうち、上段を雄池（ム）、下段を雌池（メ）と通称しているが、近世における呼称は不明である。

雄池は谷の斜面を削り、平面方形の池としている。斜面を削った箇所の下半は岩盤が露出し、上半は土留めの石垣があったと考えられるが、現在は石垣の3分の1ほどは崩れている。このほか、池に入るための石垣と石段を確認することができる。また、北出丸からの道、二の丸下段の捨曲輪へとつながる道はいずれも非常に狭い。

雌池も基本的には同様で、雄池を一回り大きくした構造である。上部の土留め石垣は大半が崩落しているとみられ、一部が残るのみである。雌池の手前には比較的広い曲輪状の平坦面が付属している。

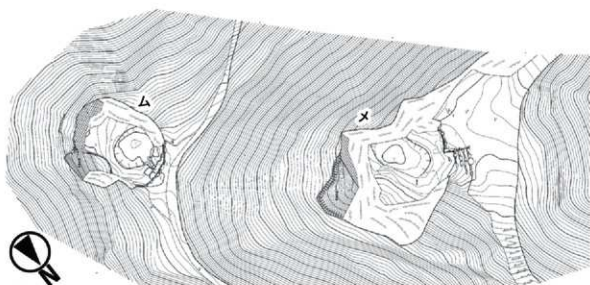
城の搦手にあたる斜面の谷筋に造られた2段の池は、地下からの湧水と斜面を流れる雨水を集中させて水を確保していたと考えられる。現況は斜面からの崩落により埋まりつつあるが、雨が降らない日が続いても常に湿気を帯び、雨の後には水位が回復する。

現在はここからさらに斜面を下る道があり、ふもとの若宮八幡社（白濁八幡社）へとつながる（若宮の道）。水の手が描かれる絵図は元文三年絵図のみであり、これには若宮の道は描かれず、北出丸から雌池の曲輪まで途切れている。

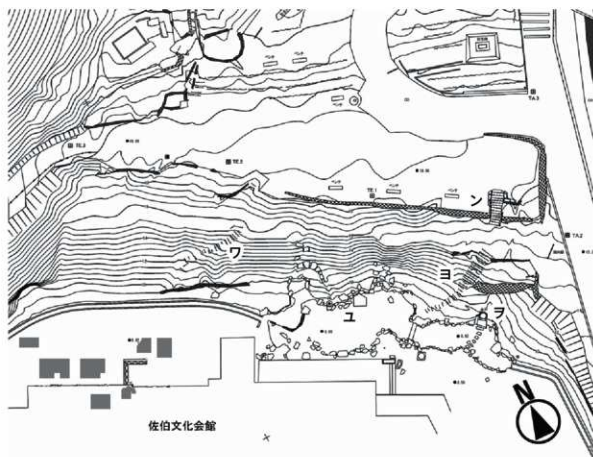
・三の丸（第4図モ～ヤ・第11図ユ～ン）

三の丸は現在の佐伯文化会館が位置する城山南麓の平坦面である。築城当初から何らかの施設はあったと考えられるが、寛永十四





第10図 佐伯城水の手遺構測量図 (S=1/100)



第11図 佐伯城三の丸遺構測量図 (S=1/500)

(1637)年に施設が増設され、藩庁機能が山頂から三の丸に移される。三の丸御殿が描かれた資料で最も古いものは、元文三年絵図であるが、現在三の丸の遺構として見ることができるものは、高さ約6mになる石垣と櫓門(モ)のみである。石垣は隅角部がカーブを描き、近代の石垣と考えられるが、さまざまな時代の石積み方法が混在している。また、各絵図に描かれる石垣南端の門は、現在は藪に覆われて痕跡を確認することができない(ヤ)。

三の丸の櫓門は、現存する佐伯城唯一の城郭建築物である。創建は寛永十四(1637)年に廻り、享保十一(1726)年に再築、修理を加えられつつ現在まで維持されている。

また、三の丸御殿の裏には庭園があったと

考えられる。現況は文化会館の裏に池(ユ)があり、その奥の斜面に階段(ヨ・ワ)や、井戸(ヅ)などを確認できる。斜面の上端には石垣(ン)が見られ、階段が設けられている。池は深さ30cm程度で、周囲を石組で囲む。現在は枯れてしまっているが、文化会館が建てられる以前は湧水があり、オオイタサンショウウオなども生息していた。斜面にも遺構が見られることから、池とその奥の斜面まで含めて庭園としていたと考えられる。絵図では省略されていることが多く比較は難しいが、土堀によって囲まれる点は共通である。池は元文三年・明治四年頃絵図に描かれ、延享二年絵図では省略された可能性が高いが、宝永期まで廻るかは不明である。

(宝永六年御手日記)抜粋

四日  
一本丸惣側之御斗練場ニ不申付候ハ、風雨強損し可申、且西  
出九下段ニ式間半ニ十間之小屋、今日も掛せ申候、并下切之  
大、此間三百人ツ、申付候、今日も式百人引百人ニ申付候、  
右之通、外記申聞候付、成程尤之義、其通ニ致候様申付候、

(毛利高寛公申渡書)抜粋

御城

一 二重櫓	五ヶ所
一 平櫓	宍ヶ所
一 櫓門	四ヶ所
一 冠門	八ヶ所
一 三ノ丸御木城道	貳百九拾間
一 御城之直高三ノ丸地形ハ六十間	
一 御城地形際廻り	三百三十三間余
一 御城之台地形	幅長 八十九間
一 御城山廻り	十三間又者十間
一 御天守台石垣	貳拾七町貳拾間
	七間半
	八間半

資料6 「諸旧記」  
(佐伯市教育委員会 1995  
『佐伯藩史料 温故知新録』第一集)

資料5 「高慶公御手日記写(佐伯)」  
(佐伯市教育委員会 1999  
『佐伯藩史料 温故知新録』第三集)

### 第3章 まとめ

今回の調査では、城山全体の踏査を行い、近世の絵図と比較したうえで近世遺構と判断できるものを図化していった。その結果、一部には明らかな後世の手が加わった箇所もあるが、全体的には良好に城郭遺構が残されていることを確認した。

山頂の石垣で築かれた曲輪群は佐伯城の主要な部分であり、各時代の絵図に描かれている。本丸曲輪と本丸外曲輪を直結するコンクリート製階段は近代以降の大きな改変と言えるが、この階段を除けば石垣の位置や構造はほぼ近世の絵図に描かれたとおりである。各曲輪には塙や槽類の基礎も見ることができ、一部には門の礎石も残されている。各曲輪に1箇所ずつ建てられた二重櫓は、本丸と二の丸では痕跡がなくなっているが、他の曲輪の二重櫓基礎はすべて石敷きの厳重なものである。このほか平櫓も各曲輪に描かれており、それらの基礎の一部と見られる石列も確認できる。また、山頂の縄張りでは最も特徴的と言える、登城の道から本丸外曲輪、二の丸を経由して廊下橋を通り、狭い虎口から本丸に入る構造は各時代の絵図にも描かれ、現状も完全な状態で残されている。明らかに本丸曲輪の防衛を意識した縄張りであり、小振りながらも堅固で実践的な城郭と評される。

また、三の丸や城道、捨曲輪、水の手といった遺構も城郭の一部として認識し、山頂の城郭と一体のものとして図化することで、近世山城としての佐伯城の姿が明らかになってきた。特に雄池と雌池からなる水の手は山城にとって重要な生命線の一つであり、佐伯城の実践的な面を表す遺構の一つと言える。捨曲輪についても、これまで注目されることは少なかったが、山城としての佐伯城を考える際

【参考文献】

小野英治 1965～1966 「豊後佐伯城の研究」一一一 「佐伯史談」第八～十七号 佐伯史談会  
佐伯市史編さん委員会 1974 「佐伯市史」

には重要な遺構であろう。第2章第3節で述べたように、宝永六(1709)年の時点で西出丸下段の捨曲輪の存在を示唆する文書があり、元文三年絵図では捨曲輪はそれぞれ長さや幅が記録され、城郭を構成する要素の一つとして存在し、認識されていたことが分かる。

佐伯城は慶長十一(1606)年に完成し、当初は山頂で藩政を行っていたが、寛永十四(1637)年に藩庁機能が麓の三の丸に移る。それ以降70年程人の手が入らず、荒れるにまかせた時期があった。そのため、宝永六年から築城当初の姿に復元する大修築が開始されるのであるが、つまり築城から大修築が始まるまでの約100年のうち、山頂が管理され利用されていたのは初期の約30年間で、後半の70年ほどは利用されていなかった。この間に捨曲輪を追加するような大規模な普請事業が行われたとは考え難い。現在のところ、これらの根柢や山腹に展開する遺構は近世初期にまで遡る可能性が高いと考えられる。山頂の曲輪群についても、縄張りや主要な建築物の位置はほとんど変化がなく、現在の測量図とも良く一致する。災害や老朽化によって石垣の積み直しや建物の再築があったとしても、基本的には築城当初の縄張りを残していると考えて良いのではないだろうか。

しかし、今回の調査はあくまでも佐伯城全体の現状把握と記録を主眼に置いたものである。そのため、記録をとった個々の遺構が、真に近世以前のものであるのか、また、近世の各時期に行われた様々な修理や改修と、どのように対応するのか、といった詳細な検討には及んでいない。今後は文献資料の調査や、石垣の詳細な観察、必要に応じて発掘調査も実施することで、こうした課題にあたる必要があるだろう。今回作成した測量図は様々な調査結果をフィードバックし、蓄積していくための基礎資料となるものである。



## 写真図版

写真1



1947年 佐伯城跡周辺空中写真（米軍撮影）



1948年 佐伯城跡周辺空中写真（米軍撮影）



1965年 佐伯城周辺空中写真（国土地理院撮影）



2008年 佐伯城跡周辺空中写真（国土地理院撮影）

写真3



佐伯城跡遠景 南東から



三の丸櫓門 南東から



積雪の三の丸櫓門 南から



三の丸石垣全景 南から



三の丸石垣北端 東から





西出丸全景 北から



西出丸虎口 南東から



西出丸二重櫓跡 北東から



西出丸建物基礎 南から



西出丸石垣上の石列 南から



西出丸高射砲跡 北から



西出丸南端の犬走り 東から



西出丸西の犬走り 南から

写真5



二の丸全景 北東から



二の丸渡槽跡 北東から



二の丸平槽跡 西から



二の丸建物基礎 東から



二の丸石垣上の石列 南から



二の丸西の犬走り 南から



本丸外曲輪と本丸虎口 西から



本丸虎口 西から



二の丸虎口と廊下橋跡 東から



廊下橋跡 南から



本丸 東から



本丸石垣 南から



天守台跡 東から



本丸櫓跡 南から



本丸外曲輪二重櫓跡 北西から



本丸外曲輪虎口 南から

写真7



本丸石垣 北東から



本丸外曲輪北の犬走り



本丸外曲輪北の食い違い虎口 南から



本丸外曲輪北の食い違い虎口 南東から



北出丸虎口 東から



北出丸平櫓跡 南から



北出丸二重櫓跡 南から



北出丸西の犬走り 北から





雄池全景 北から



雄池石組護岸と階段 南から



雌池全景 北西から



雌池全景 北から



雌池石組護岸と階段 北東から



雌池石組護岸と階段 南から



西出丸下段の捨曲輪 南西から



西出丸西斜面の溝 東から

写真9



北出丸下段の捨曲輪 東から



北東尾根上の捨曲輪 南から



本丸下段の捨曲輪 北東から



捨曲輪をつなぐ通路 北東から



登城の道の池跡 南西から



独歩碑の道に残る城道 南から



三の丸庭園 南東から



三の丸庭園 南東から

佐伯市内遺跡  
試掘・確認調査

## 第4章 試掘・確認調査の結果

ここでは、平成21年度から平成25年度まで、国庫補助を受けて実施した開発対応の試掘・確認調査の結果を報告する。

これらの調査のうち、半数は佐伯城下町での調査である。これは、開発頻度の高い佐伯市街地が、佐伯城下町を内包していることが原因である。調査原因としては、佐伯市が実施する公共事業が多い。土地造成や公共施設の建設など大規模なもののほか、東日本大震災以降は緊急避難路設置に伴う調査が発生するようになった。

報告にあたっては、佐伯城下町など同一遺跡内で複数回の調査を実施した場合、遺跡名の後に括弧書きで地点名を示した。また、周知遺跡外での試掘調査は、地区名や施設名を示している。



第12図 試掘・確認調査遺跡位置図



## 第1節 平成21年度の調査

(1) 門前地区石塔群試掘調査

調査地：佐伯市大字上岡

調査期間：H21.A.13～H21.A.17

### 調査の概要

調査地点は佐伯市大字上岡のうち、門前区に所在する。西には中世佐伯氏の拠点となった梅牟礼城がある。門前区には以前には大蔵八幡社があり、大永六年銘の春好供養塔とよばれる、佐伯氏と関わりの深い僧侶の墓石があった。門前という地名の由来もここにあると思われる。現在、大蔵八幡社は無くなっているが、春好供養塔は門前区に残されている。近年、梅牟礼城の裾を高速道路が通るため、梅牟礼山側に住んでいた人のための移転先として、門前区での土地造成を行っていた。その中で、地区の一面に石塔が集め置かれた箇所があり、移転の必要性が生じたため、試掘調査を行った。

石塔群に絡みついた植物を取り除くと、少なくとも計16基の五輪塔が3列に並べられていた。現況は窪地になっているが、試掘調査の結果、これは周囲の盛土造成によるものであり、以前は塚状のマウンドの上に石塔群が置かれていたことがわかった。マウンドからは近世から近代の遺物が出土し、石塔の下位に遺構は確認できなかった。

本石塔群は、近代以降に盛土によって塚をつくり、近隣の石塔を集合させて安置したものと考えられる。既に原位置から移動されており、移転は問題ないと判断した。調査後、石塔群は春好供養塔の近くに移転された。

調査原因：土地造成工事

処置：慎重工事



第13図 調査地点位置図 (S=1/50,000)



第14図 周辺地形図 (S=1/10,000)



写真10 試掘調査状況

## (2) 梅牟礼遺跡(喜八前) 確認調査

調査地：佐伯市大字上岡

調査期間：H21.11.10

### 調査の概要

調査地は佐伯市大字上岡のうち、字喜八前である。梅牟礼遺跡の南端に近く、北東の尾根には中世佐伯氏の山城とされる木戸城跡がある。尾根の裾部に住宅を建設するため、確認調査を実施した。

調査は主に重機掘削によって行った。建設予定地内にトレンチを2箇所設定して掘削を開始したが、どちらも地表から12mは現代の造成土である。T1ではこの時点で水が湧き、さらに深く掘削することができなかった。T2では現代造成土の下位に現代の水田層である青灰色粘土層があった。さらに地表から1.6mまで掘削したところで水が湧いたため、こちらも掘削を終了した。どちらも湧水量は多く、ここからも宅地となる以前は水田であったことが分かる。工事予定地周辺は本来は谷筋にあたり、かなり深くまで粘土層が堆積していると考えられる。

以上の結果から、住宅建設による遺跡への影響は無いと判断した。

調査原因：個人住宅建設

処置：慎重工事



第15図 調査地点位置図 (S=1/50,000)



第16図 トレンチ配置図 (S=1/1,500)



写真11 T2土層 北から

### (3) 佐伯城下町（三府役所跡）確認調査

調査地：佐伯市大手町

調査期間：H22.2.17～H22.2.23

#### 調査の概要

佐伯城下町の範囲で、歴史資料館を建設するため、建設予定地の確認調査を実施した。予定地は近世後期の時点で藩庁の一部が置かれており、三府役所と呼ばれる施設があった。その後、明治期には旧藩主毛利家の別荘が建てられ、昭和以降は別荘の一部を利用する形で料亭が営まれていた。

確認調査実施の前に、既存建築物の解体工事にも立ち会い、鉄骨造建物部分はコンクリートの基礎や地下駐車場によって遺跡が破壊されていることを確認しているが、木造建物部分や周辺については遺跡の存在が予想された。

確認調査は木造建物部分とその周辺を対象として行った。旧宴会場、廊下部分に設定したT1・T2では表土下位の黄褐色礫混土層上面で礎石や石列、柱跡を検出し、出土遺物から近代以前の遺跡が残されていることが判明した。T3は明治期の建築と想定されている居間の裏に設定したが、遺構、遺物ともに検出されなかった。また、旧宴会場や薬医門東側には立会調査時に井戸を確認している。

鉄骨造建物部分以外では大規模な現代の攪乱は見られず、近代以前の旧藩主別荘に伴う遺構は比較的多く残されていると考えられる。このため、建設工事着工前の本調査が必要であると判断した。

調査原因：資料館建設

処置：発掘調査



第17図 調査地点位置図 (S=1/25,000)



第18図 トレンチ配置図 (S=1/1,500)



写真12 T1遺構検出状況 南から

## 第2節 平成22年度の調査

### (1) 佐伯城下町(大手前地区)確認調査

**調査地:** 佐伯市大手前1丁目

**調査期間:** H22.9.14 ~ H22.10.29

#### 調査の概要

佐伯市が進める大手前地区都市再生土地区画整理事業に伴い、区画整理予定地での確認調査を実施した。なお、以前に大型の商業施設が建っていた範囲と、現在も店舗として利用している範囲は除外した。

調査地は近世の城下町の中でも高祿の給人屋敷地である。しかし近代以降も佐伯市街の中心であったため、頻繁に開発がなされている。

調査はトレンチを12箇所設定して行った。屋敷地のほか、近世の堀を埋め立てた場所についても、護岸等を検出できる可能性を考えて、トレンチを設定した。

調査の結果、堀跡に設定したトレンチから遺構は検出されず、近代の埋め土を確認した。屋敷地に設定したトレンチからは、石列や建物基礎等を検出した。遺構からは近世から近代までの遺物が出土し、異なる時期の遺構が混在していると想定される。

今回の調査結果から本調査が必要と判断したが、状況が明らかとなったのは区画整理範囲の一部である。確認調査を実施できなかった地点については、事業の進捗に伴って、随時確認調査を行う必要がある。

**調査原因:** 土地区画整理

**処置:** 発掘調査



第19図 調査地点位置図 (S=1/25,000)



第20図 トレンチ配置図 (S=1/3,000)



写真13 T10遺構検出状況 西から

(2) 佐伯城下町(潮谷寺)確認調査

調査地：佐伯市大手前1丁目

調査期間：H22.11.9

調査の概要

佐伯城下町内に所在する潮谷寺の境内に、新たに位牌堂を建設するため、確認調査を実施した。

調査地点は近世以来変わらず潮谷寺の境内である。昭和39年から数年前まで幼稚園が建てられていた。

トレンチを2本設定し、重機で掘削したところ、T1では地表から50cm程度まで現代の整地層であった。当地に建てられていた幼稚園の基礎に伴う整地であろう。その下位には18世紀代の遺物をわずかに出土する層があり、近世の整地層の可能性が高い。上面で精査を行ったが、遺構はなかった。墓地近くに設定したT2では、地表から80cm程まで樹根によるかく乱が著しい。住職によると、以前は墓地との境に桜や柿などの樹木を植えていたらしく、これによるものと思われる。かく乱の下には18世紀頃の遺物を含む整地層を確認できる。

どちらの地点でも、建設する建物の基礎による影響は近世整地層まで達しないことを確認し、調査を終了した。

調査原因：位牌堂建設

処置：慎重工事



第21図 調査地点位置図 (S=1/25,000)



第22図 トレンチ配置図 (S=1/1,500)



写真14 T1東端土層 北から

### (3) 佐伯市役所試掘調査

**調査地：**佐伯市中村南町

**調査期間：**H23.2.22～H23.2.23

#### 調査の概要

現佐伯市役所の庁舎建替のため、新庁舎建設予定地の試掘調査を行った。建設予定地は、現庁舎の駐車場である。

昭和39年に現庁舎が建設される以前は、昭和35年まで佐伯豊南高校の敷地であった。豊南高校の校舎は現庁舎の位置にあり、現駐車場は校庭である。それ以前も大型の建物は建てられていない。近世では城下町の範囲外であり、絵図では道沿いにわずかな小屋が描かれている。中世以前の様相は明らかではなく、塩屋村と呼ばれる集落があったと伝わっている。現時点で、市役所の周辺は周知の埋蔵文化財包蔵地ではない。しかし、近世や中世の遺構が存在する可能性もあるため、試掘調査を実施した。

駐車場として利用されているため、調査は駐車場南端の植栽土手にトレンチを4箇所掘削して行った。いずれのトレンチでも約1mの現代盛土の下位に、近代の整地層が見られる。さらに下位は青灰色砂質土層、砂礫層と続き、水が湧く。中世・近世遺物を含む整地層は無く、遺物・遺構ともに検出できない。

また、後日に駐車場北側の建物解体に立ち会い、下層の確認を行った。その結果、やはり現代の建物基礎や整地層の下位に遺物を含まない砂質土層があり、中世・近世の遺構・遺物は検出されなかった。

これらの結果により、遺跡は無いと判断した。

**調査原因：**市役所建設

**処置：**工事着工



第23図 調査地点位置図 (S=1/25,000)



第24図 トレンチ配置図 (S=1/3,000)



写真15 T4西壁土層 東から



### 第3節 平成23年度の調査

#### (1) 木立永野地区試掘調査

**調査地：**佐伯市大字木立字永野

**調査期間：**H22.9.14～H22.10.29

#### 調査の概要

佐伯市では、佐伯市大字木立字永野において、大規模な土地造成計画が検討された。この時点では、造成工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、東に開けた広い緩斜面で、川が近くに流れるなど、集落遺跡の存在が考えられたため、試掘調査を実施した。

対象は造成予定地約8haであるが、東側の半分は既に工場が建てられており大きく削平されている。また西側は尾根につながる急斜面となっているため、これらは調査対象から除外した。その結果、約3.5haに15箇所のトレンチを設定した。

調査の結果、調査区北側のトレンチでは杉栽培による削平が顕著で、耕作土下位には礫層が現れる。一方、南側のトレンチでは、アカホヤ火山灰など自然堆積層が比較的良好に観察できるが、2箇所のトレンチを除いて遺構・遺物は無い。

南の尾根裾部に設定したトレンチ2箇所では、アカホヤ火山灰層の下位で縄文時代早期の条痕文土器が少量出土し、集石遺構と炉穴を検出した。

これらのことから、造成予定地の一部には縄文時代早期の集落が広がることが判明したため、工事着工に際しては発掘調査が必要であると判断した。

なお、今回の調査結果によって、永野遺跡として新たな埋蔵文化財包蔵地の登録を行った。

**調査原因：**土地造成

**処置：**発掘調査



第25図 調査地点位置図 (S=1/25,000)



第26図 トレンチ配置図 (S=1/5,000)

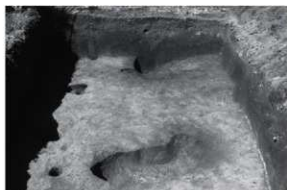


写真16 T2完掘状況 南から

#### 第4節 平成24年度の調査

(1) 佐伯城下町（竹中家屋敷跡）確認調査

調査地：佐伯市城下東町

調査期間：H25.3.11～H25.3.14

##### 調査の概要

津波被害を最小限に抑えるための避難路として、佐伯城麓の小高い場所に通じる階段と通路を設置することとなった。設置場所は城下町の範囲内で、近世後期には竹中家の屋敷にあたる。

現況は道路から2～3m程高くなっており、石垣による土留めが施されている。避難路道路から階段で上段に上り、25mほど奥まった場所にある、竹中家屋敷跡である遊休地へと通じる通路を整備する計画であった。通路は地表面にコンクリートを盛る工法をとるため、遺跡への影響は少ない。階段を設置するための掘削を伴う、現況道路からの段差、通路途中の段差、竹中家屋敷入口の段差の3箇所を確認調査を実施した。

現況道路からの段差については、石垣はごく一部であることが判明し、これを避けて階段を設置することとなった。通路途中の段差は、調査によって土留めと思われる石積の痕跡を発見した。根石の一部しか残されていないと思われるが、確認できる石積は残して階段を設置することとした。竹中家屋敷入口では、調査の結果、屋敷へと続く階段が良好に残されていることが判明した。そのため、階段は現状のまま残して、避難路の一部として利用することとなった。

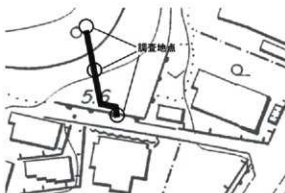
以上のとおり、工事計画に若干の変更を加えて、今回の調査で確認した遺構を保存することができた。

調査原因：避難路設置

処置：慎重工事



第27図 調査地点位置図 (S=1/25,000)



第28図 周辺地形図 (S=1/1,500)



写真17 竹中家屋敷跡階段検出状況 南東から



(2) 宇目西南戦争戦跡試掘調査

調査地：佐伯市宇目

調査期間：H25.3.22～H25.3.23

調査の概要

佐伯市を縦断するように、高压送電線の鉄塔を建てるため、市内での建設予定地について埋蔵文化財の照会を行った。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当する箇所はなかったが、宇目の県境付近には広範囲に西南戦争時の台場群が分布しており、一部地域では鉄塔建設により台場が破壊される可能性があった。

工事による影響を確認するため、踏査を行ったところ、1箇所建設予定地から約10mの位置に台場があることが判明した。そのため、この1箇所についての試掘調査と測量を行い、今後の建設についての調整を図ることとした。

調査対象とした台場は、赤松峠東台場群の1基である。東西方向の尾根の鞍部に、南東向きに掘られた台場である。台場群の中でもかなり小型で、現況ではわずかに5mほどの長楕円形の窪みが見られる程度である。トレンチを掘削した結果、南東向きに盛られた土塁などは確認できなかった。風雨で流れてしまったが、尾根のわずかに北西側を掘り窪めていることから、尾根の稜線を土塁のように利用した可能性が考えられる。遺物は明治期の小坏片と官軍スナイデル銃の薬莖が出土した。

調査原因：送電線建設

処置：埋土保存



第29図 調査地点位置図 (S=1/25,000)



第30図 台場周辺実測図 (S=1/300)



写真18 トレンチ土層 北から

## 第5節 平成25年度の調査

### (1) 佐伯城下町（戸倉家・保田家屋敷跡）確認調査

**調査地：**佐伯市

**調査期間：**H25.4.17～H25.4.26

#### 調査の概要

佐伯城下町の範囲内で、銀行の店舗建設に伴う確認調査を行った。近世末には佐伯藩家老戸倉家と、保田家屋敷跡にあたる。

工事予定範囲は駐車場であり、利用者の妨げになることを避けて調査場の両端それぞれの屋敷地にトレンチを設定した。

戸倉家側に設定したT1では、近代～現代整地層を除去すると、近世末頃の遺物を含む整地層を全体に検出した。生活面であった整地層は、後の造成等によって消滅したと考えられる。しかし一部には建物基礎と見られる木片も確認され、面的な調査によって遺構を検出できる可能性は高い。地下水が地下80cmで湧き出すが、整地層は地下2m以上まで堆積している。

保田家側に設定したT2では、近代遺構の造成が浅いレベルに留まり、近世の遺構や整地層が良好に残されていた。トレンチ内を掘削したところ、17世紀代の遺物と、それらを含む整地層から礎石や柱穴を検出した。柱穴は50cm以上の深さがあり、最下部は砂層に達し、根石を掘える。また、土層には幾重にも重なる嚴重な整地が確認でき、何らかの施設に伴うものと考えられる。

どちらのトレンチからも近世の整地層を確認し、工事予定地全面に広がっていると考えられたため、発掘調査が必要と判断した。

**調査原因：**店舗建設

**処置：**発掘調査



第31図 調査地点位置図 (S=1/25,000)



第32図 トレンチ配置図 (S=1/2,500)



写真19 T2遺構検出状況 南東から



## 報告書抄録

ふりがな	さいきじょうあとそくりょうちょうさほうこくしょ	さいきしないいせきしづかつかにんちょうさほうこくしょ
書名	佐伯城跡測量調査報告書 佐伯市内遺跡試掘確認調査報告書	
シリーズ名	佐伯市文化財調査報告書	
シリーズ番号	第5集	
編著者名	福田聡 五十川慎也	
編集機関	佐伯市教育委員会	
所在地	〒876-0853 佐伯市中村東町6番9号 TEL0972-22-4234 FAX0972-22-3912	
発行年月日	2014年3月31日	

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
佐伯城跡	大分県佐伯市宇城山	44205	205011	32° 57' 36"	131° 53' 23"	20090401 ~ 20104031		測量調査
(門前地区石塔群)	大分県佐伯市大字上岡	44205	則知遺跡外	32° 58' 12"	131° 51' 54"	20090413 ~ 20090417	3㎡	土地造成工事
御幸礼道跡 (喜八前)	大分県佐伯市大字上岡	44205	205002	32° 57' 19"	131° 51' 26"	20091110	8㎡	住宅建設
佐伯城下町 (三府役所跡)	大分県佐伯市大手町	44205	205012	32° 57' 25"	131° 53' 33"	20100217 ~ 20100223	53㎡	資料館建設
佐伯城下町 (大手前地区)	大分県佐伯市大手前1丁目	44205	205012	32° 57' 21"	131° 53' 37"	20100914 ~ 20101029	275㎡	土地区画整理
佐伯城下町 (瀬谷寺)	大分県佐伯市大手前1丁目	44205	205012	32° 57' 24"	131° 53' 40"	20101109	15㎡	位牌堂建設
(佐伯市役所)	大分県佐伯市中村南町	44205	則知遺跡外	32° 57' 34"	131° 54' 00"	20110222 ~ 20110223	10㎡	市役所建設
永野道跡	大分県佐伯市大字木立	44205	205099	32° 54' 32"	131° 55' 37"	20110914 ~ 20111029	380㎡	土地造成
佐伯城下町 (竹中家屋敷跡)	大分県佐伯市城下東町	44205	205012	32° 57' 37"	131° 53' 35"	20130311 ~ 20130313	10㎡	遊歩路設置
(西南戦争戦跡)	大分県佐伯市宇自	44205	則知遺跡外	32° 48' 49"	131° 41' 30"	20130322 ~ 20130323	2㎡	送電線建設
佐伯城下町 (戸倉家・保田家屋敷跡)	大分県佐伯市城下西町	44205	205012	32° 57' 27"	131° 53' 39"	20130417 ~ 20130426	30㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯城跡	城跡	近世	石垣・曲輪・水の手 城道など		
(門前地区石塔群)	石造物	中世・近代	五輪塔	陶磁器	
御幸礼道跡 (喜八前)	包蔵地				
佐伯城下町 (三府役所跡)	城下町	近世・近代	礎石・ピット・土 杭・溝	陶磁器	
佐伯城下町 (大手前地区)	城下町	近世	土杭・ピット・溝・ 井戸	陶磁器	
佐伯城下町 (瀬谷寺)	城下町	近世		陶磁器	
(佐伯市役所)	その他			陶磁器	
永野道跡	集落	縄文	集石遺構・炉穴・ ピット	土器	
佐伯城下町 (竹中家屋敷跡)	城下町	近世	石垣・石段	陶磁器	
(西南戦争戦跡)	その他	近代	台場	陶磁器・薬莢	
佐伯城下町 (戸倉家・保田家屋敷跡)	城下町	近世	礎石・ピット・土杭	陶磁器・瓦	

佐伯市文化財調査報告書第5集

**佐伯城跡測量調査報告書  
佐伯市内遺跡試掘確認調査報告書**

2014年3月31日

発行 佐伯市教育委員会  
〒876-0853 大分県佐伯市中村東町6番9号  
TEL 0972-22-4234 FAX 0972-22-3912

印刷 佐伯印刷株式会社  
〒876-0823 大分県佐伯市女島9032  
TEL 0972-23-0170 FAX 0972-23-0171

